



特集

地域の
最前線に立つ

長崎大学の 卒業生たち

Graduates
of
Nagasaki University

長崎大学にとって、地域の活性化は大きな課題です。
大学を卒業したOBやOGの中には、地元や地域のために汗を流す人々も大勢います。
そこで、今注目を浴びているさまざまな「現場」で活躍する
卒業生の姿を追いかけ、じっくりインタビューしました。
その活躍ぶりもさることながら、今だから見えてくる長崎大学での学びについてのメッセージ、
現役学生やこれから長崎大学を目指す人へのエールもいただきました。
少し先を行く先輩たちの背中には、刺激でもあり、励みでもあります。



相手の心に寄り添い 音楽を通して心の傷を癒したい

Profile

インズハート
ToshiさんとJyunさん2人とも2013年に長崎大学医学部を卒業し、福岡の病院へ。Toshiさんは形成外科、Jyunさんは精神科の医師として別々の病院に勤務。医師活動の関係上、本名と勤務先は明かしていません。

全国ツアーも行う 現役医師の音楽ユニット

八月八日、平和公園で行われた「平和の灯コンサート」に出演したInsheart。被爆体験をテーマとした楽曲を長崎大学教育学部附属小学校の子どもたちと共に歌いあげました。ヴァイオリン／ヴォーカルのToshiさんと、ギターのJyunさん。二人は長崎大学医学部を卒業し、福岡の病院で働く現役の医師です。二〇一五年にユニットを結成して以来、九州を中心に病院や施設、学校などで年間約四十の演奏をこなし、その様子は新聞やテレビでも紹介されるようになりました。

「平日は仕事優先で、主に週末を中心に音楽活動をしています。この夏は、東京、大阪、福岡を回るライブツアーも行いました。全国でファンが待っていてくれます。ありがたいですね」とToshiさん。

クシヨンです」。

「医師となり、しばらくは音楽から遠ざかっていたんですが、二人ではよく会っていました。そのうちに共通の体験が浮かび上がってきました。救急救命などの現場に運ばれてきて、懸命に処置して命を取り留めた患者さんが、回復しても笑顔がなくて、心が癒されていないことがあります。医療の限界を感じながら自分たちにできることを模索している中で、音楽ならば心を癒すことが可能かもしれないと気付きました」。

医師だからこその出会いを音楽にし、その言葉の重みを共有しながらの



ギター Jyunさん

ヴァイオリン／ヴォーカル Toshiさん

医学部を目指す高校生や学生にメッセージをいただきました。「Toshiさん」希望を胸に、努力し続けなければ必ず道は開けると思っています。応援しています!」「Jyunさん」努力を止めず、がんばり続けてください。その先の景色はきっと素晴らしいと思えます」。



Insheart Toshi & Jyun

ステージ。病院でのコンサートも多く、患者さんや家族が集まって来ます。「うまく歌って盛り上げるよりも、聴く人に僕らの感情をしっかりと届けたい。病院や施設での演奏は毎回、聴いている人が明日退院するかもしれないし、もしかしたら最後の生演奏になるかもしれないという思いでやっています」。そうToshiさんは語ります。

大学の軽音楽部での出会い さだまさしさんも絶賛

心理学系の大学を大学院まで卒業したJyunさんは、精神科の医師になる夢をかなえるべく一念発起して長崎大学医学部に合格しました。現役合格したToshiさんとの年齢差は八歳。二人は軽音楽サークルで出会いました。「医学部は、他の学部と比べて学生の

年齢幅もあり、年齢の壁はなかったですね。サークルではハードロックのバンドを組んで、長大祭にも出演しました。医学部は規律の厳しい体育系サークルが多いのですが、僕らはそういう縛りが合わなくて、軽音楽の緩めの空気感がちょうどよかった。大学でのテストが大変だった分、いい息抜きになっていました」とJyunさん。

NHKのテレビ番組「今夜も生でさだまさし」でさだまさしさんに絶賛されて同番組に出演を果たしたことでファン層は全国に広がりました。そのステージに感動した人が口コミで伝えるなど、出演依頼は学校や施設などから相次いでいます。楽曲の依頼も増えてCDも三枚リリースし、曲ごとに動画制作をしてインターネットで配信もしています。このままどんどん人気が出て、医師を辞めて音楽活動に専念するなんてことは……?

「平和の灯コンサート」で披露した「おばあちゃんのこのしもの」は、長崎大学病院からの依頼で2016年に制作しました。「被爆体験を聞きに行って、制作期間は4カ月ほど。原爆を扱う以上、安易にまとめられない。すごく苦しみながら発表当日の夜明けに完成しました」とJyunさん。この日、2人と子どもたちの声は、暮れゆく平和公園一帯をそっと包み込みました。

自ら命を絶とうとする少女の苦しみ。障がいのある子どもを持ったお母さんのつぶやき。愛する人を病気で亡くした遺族の気付き。Insheartの楽曲はどれも命の尊さをテーマとし、聴く人の心に染みていきます。作詞・作曲はすべてJyunさんが手掛けています。

「日々接している患者さんやそのご家族、他の医療者の方々との出会いから生まれる曲がほとんどですね。会話の中で「あ、これは」と自分の心に引っ掛かって揺さぶられる何かを感じたら、そこでサビのフレーズがぱっと浮かんでいきます。だからすべてノンフィ

Jyun「あ、それは百パーセントあり得ません(笑)」。

Toshi「今の活動を淡々とやるのみです。メディアに出るのも、多くの人に聴いていただくことで、もしかしたら僕らの曲で『救われた』と感じる人の耳に届くかもしれないから」。

「Insheart」の名前の由来は、「Inside your heart. 体だけでなく心も元気になってほしいから、あなたの心に寄り添いましょう」。

「ひとたび医師を志すからには、その体は患者のもの」。医学部基礎研究棟の壁に掲げられたボンベ・ファン・メールアドレスフォルト(長崎大学医学部創始である医学伝習所の医師)の言葉が思い出されます。

医学部軽音楽サークル時代にはバンドを組んで2011年の長大祭にも出演。今とはまったく正反対のバリバリのハードロックだったそうです。





時代時代の人々の思いが宙に舞う 長崎くんち、コッコデシヨ

Profile

やまさき たけし
1960年長崎生まれ。長崎大学商業短期大学部卒業。大学在学中に理容師免許を取得。18歳より樺島町太鼓山(コッコデシヨ)に携わり、2011年太鼓山指揮者となる。2015年長崎市議会議員に初当選。

華麗織細、ダイナミック
シーボルトも見た伝統文化

「アヨーヤーサー!」ドン! ドン!
ドン!

夕暮れ。長崎市樺島町。ビジネス街に隣接する崖下のマンション街。そのビルの間から、男たちの野太い掛け声と太鼓の音が響き渡ります。

長崎の秋の大祭「長崎くんち」は、七十七カ町が順繰りに七年に一度出し物を奉納する仕組みですが、今年は一番人気といわれる太鼓山(コッコデシヨ)が七年ぶりに出演します。三十六人の担ぎ手が、太鼓を叩く子どもたちを乗せた一トン以上の太鼓山を担ぎ、気合いを入れて宙高く放り投げ、片手で受け止める。その際の「コッコデシヨ!」の掛け声が、そのまま出し物の通り名になりました。

今年の太鼓山の総指揮者である山崎猛さんは、長崎大学商業短期大学部

(商短。現・経済学部夜間主コース)の卒業生で、長崎市議会議員でもあります。

「太鼓山の歴史は古く、一七九九(寛政十二)年から始まりました。出島のオランダ商館医だったシーボルトの著書『日本』にも、『鯨の潮吹き』と共に紹介されています。私は今年で六回目。前回は指揮者でしたが、今年は総



山崎さん(右)の合図で、すべての演技が始まります。前方に駆ける「トバセ」、回転する「マワセ」。気合を入れて「コッコデシヨ!」掛け声は36人の息と力を揃える大切な合図でもあります。

指揮者として、出し物の演技だけでなくしきたりや太鼓山、衣装を含めた全体を統括します」。

くんちそのものが三八〇年以上の歴史を担うだけに、伝統を継承するのも一苦労では?

「くんちは、変わらないように変わる」とは、ある歴史研究家の名言ですが、変えてよいものと、変えてはいけないものがあると私は考えています。過去のしきたりでも時代に合わないものは変えていきたい。例えば、子どもたちは太鼓を足に挟んで打ち続けるので太ももの皮がむけて泣くほど痛くなる。それをしきたりだから我慢しろというのはいかにかわいそう。サポートで保護することにした。根性論では今の子どもはついてこられませんか。オリジナルTシャツやグッズを売り出して活動費に充てたのも樺島町が最初でした。各家や商店を一軒ずつ回る「庭先まわり」は、マンションが多い地区はまとめて御花を集めて近くの公園でしっかり演じるやり方も、私たちが先鞭を

樺島町太鼓山 長采総指揮者

山崎 猛さん

Takeshi YAMASAKI



着けました。私は市議会議員でもありますが、その公園には一部に石畳を敷くよう要望したのです。そうすれば、船回しもできます。くんちは長崎の大切な伝統文化。継続のための変革は必要です」。

逆に変えないものとは?

「掛け声ですね。コッコデシヨの掛け声は波を表しており、強弱を付けて一息に掛けるのが風流です。高音でわめくのはおかしい。子どもたちにも、采を持つてしなるのは風をはらんだ帆を表すことなど、身のこなし方一つから意味を伝え、美しくなるよう指導します」。

大学での勉強癖が
議員としても役立つ

学生時代、山崎さんは働きながら商短に通ったのですね。

「実家の理容院で後を継ぐために働いていましたが、教師になりたいと夜学に通っていました。勉強は結構がんばって、三年間のうち二年で単位を全部取って、三年目はサークルのバスケットボールをしに通ったようなものです。そのクラブは今でも続いています。家族ぐるみのお付き合い。先輩・後輩との出会いがあったのも大学のお

かげですね。大学での勉強癖は、議員になってからも助かっています。分からないことはすぐ自分で調べ、知識や情報を取り込み現場に生かす。適応力を上げるのは今の時代に一番必要ですから」。

くんちのしきたりを変えていくのも、適応力の一つといえますね。「そう。どっちみち周囲からいろいろ言われるから、理論武装した方がいい(笑)」。

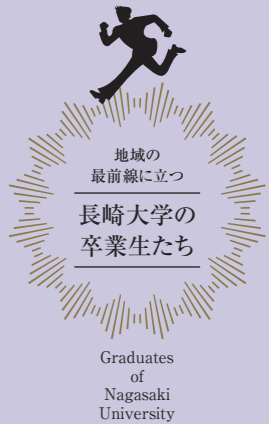
今年の太鼓山は、あえて芯となる木を新調しました。東日本大震災後、町として福島を支援した縁で、「何かお返しをしたい。ヒノキならいくらでもあるから」との申し出を受けたのです。本番には福島の方々を招待し、このヒノキが宙に舞う晴れの舞台を見てもらうのだそうです。

「人間はリレーの走者のようなもの。過去の代から譲り受けたものを、次の世代に渡していく。その中で今の時代らしさを少しだけ加えたい。私が守りたいのは伝統というより、太鼓山(コッコデシヨ)そのものです」。

山崎さんはそう笑顔で語りました。



こちらは7年前の様子。本番では絹の法被をまとい五色の太鼓山を担ぎます。その勇壮な姿を追いかけるファンも出現します。写真は「長崎游学6」もってこい」長崎くんち入門百科」(長崎文献社)より転載。



二つの世界遺産は長崎の宝 連携しながら盛り上げたい

Profile

わたなべ きよひで
1969年福岡県出身。1993年長崎大学工学部卒業。同年長崎市役所採用。情報システム課や工業労政課、文化振興課に勤務。2007年長崎大学大学院経済学研究科に入学し、2009年修了。その後、産業雇用政策課、東京事務所などを経て、2017年より現職。

紆余曲折の末に ついに世界遺産に決定

今年六月三十日、バーレーンのマナーマで開催されたユネスコの第四十二回世界遺産委員会において、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産へ登録されることが決定されました。委員長が、議論が集約されたことを示す木づちを振り下ろした瞬間、関係者も胸をなで下ろしたことでしょう。長崎市世界遺産推進室の室長、渡辺清英さんもその一人。

「あの日は、パブリックビューイングと登録記念セレモニーの会場になった外海の遠藤周作文学館にいました。会場には外海の地域の皆さんなど二百二十人ほどが集まり、登録の決定を今か今かと待ち構えていたので、決定の瞬間は一斉に歓声が上がリ、皆さんと共に喜びを分かち合いました」。

世界遺産登録の話が上がったのが二〇〇六年。実に十二年の年月を経ての決定でした。途中で紆余曲折もありましたね。

「はい。二〇一五年に国からユネスコ世界遺産委員会へ推薦書が提出されることが決定されながらも、イコモス（ユネスコの諮問機関）からの中間報告を受け、推薦を取り下げて内容を見直すことになり、二〇一六年に構成資産数を十四から十二へ、また名称を『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』から変更して提出しました。周回からは今度は大丈夫だろうと言われつつも、最後まで気が抜けませんでした」。



世界遺産登録記念セレモニーの会場に集まった皆さんと登録決定を喜んでいる様子。

長崎市企画財政部 世界遺産推進室 室長

渡辺清英さん
Kiyohide WATANABE



世界遺産の構成施設の一つ、大浦天主堂の前で。世界遺産決定を前に表面のしっくいを塗り直し、真っ白になった天主堂はいつそう存在感を増してさんざんと輝いています。

「明治日本の産業革命遺産」が、二〇一四年に先に日本の世界遺産候補にすることが決定され驚きました。結果的には長崎市に二つの世界遺産が誕生したわけですが、世界遺産推進室は大忙しではないですか？

「そうですね。『潜伏キリシタン関連遺産』の世界遺産登録をきっかけに交流人口の拡大など地域活性化を期待する長崎全体の思いの一方で、地域の生活への影響や祈りの場が乱されるのではないかと懸念の声もお聞きします。構成資産の保全を図り、県外や海外から来られる方々の満足度を高めるため、スムーズに現地にご案内するなど受け入れ態勢を充実させつつ、地域の方々に喜んでもらえる世界遺産にする必要があります。また課題はあります」。

大学院での学び直しで 視野をぐっと広げる

渡辺さんは文系のイメージがありますが、意外にも工学部卒業なんです。

「はい。機械工学科で情報処理の研究をしていました。長崎市役所は、事務方では経済学部出身が多い中で、変わり種ですね。ただ、市役所に入ってから、情報システム課で公共施設の案

内予約システムを担当したり、工業労政課でIT系のベンチャー企業を支援する事業を担当したりしましたよ。文化振興課（長崎ブリックホールと兼務）にいた頃、ニューパブリックマネジメント（行政分野に民間企業のマネジメントの仕組みを生かす手法）が注目されていて、公共ホールの運営に生かせないかと思いい、長崎大学大学院経済学研究科の社会人枠に入って学び直すことにしたのです」。

市役所勤めの傍ら大学院生に？

「はい、行くなら今だなどと思って。面白かったですね。会社の社長さんや企業会計の実務のプロなど、職場では出会えない方々と共に学び親しくなりましたし、先生方も十代の学生の頃とは違う関係性が築けました。今の学生さんに伝えたいのは、学部の四年間で進路を決められなくて自分探して悩むより、とにかくいったんどこかに入って、働いてみることに。必要とあれば学び直す機会もあり、そこで得られる知識や人脈が、以降の人生に役立つかもしれません。私も、企業誘致などのポジションに就いた時は、大学院で学んだ企業経営の知識が役立ち、視野が格段に広がりました」。

その延長線上に、世界遺産推進室があるのです。

「そうだと思います。長崎市にとって

二つの世界遺産は、地域の宝が世界に認められたことになりました。例えば、大浦天主堂とグラバー園にある旧グラバー住宅は、歴史やストーリーとしては別々ですが、すぐ行き来できるのですから、どちらも立ち寄って双方の遺産の価値を体感していただきたい。そのためには資産を後世に引き継ぎ、価値を伝えていくことが私たちの仕事です」。

長年の課題だった二つの世界遺産登録が実現した今、「世界遺産推進室」の名前も来年度に変わるかもしれません。世界遺産活用室？ 世界遺産連携室？ いずれにしてもこれからの動きが注目されます。



「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の12の構成資産のうち、長崎市には外海の出津集落(左、写真は旧出津救助院)、外海の大野集落(右、写真は大野教会堂)、大浦天主堂の3つがあります。



日本の未来に必要なとされる 海洋再生可能エネルギーの開発

Profile

すえよしりん
長崎市出身。2016年長崎大学工学部卒業。同年協和機電工業入社。事業開発部で海洋再生可能エネルギー等のプロジェクトに取り組む。

潮の流れを電力に活用したい 五島市で市場調査を行う

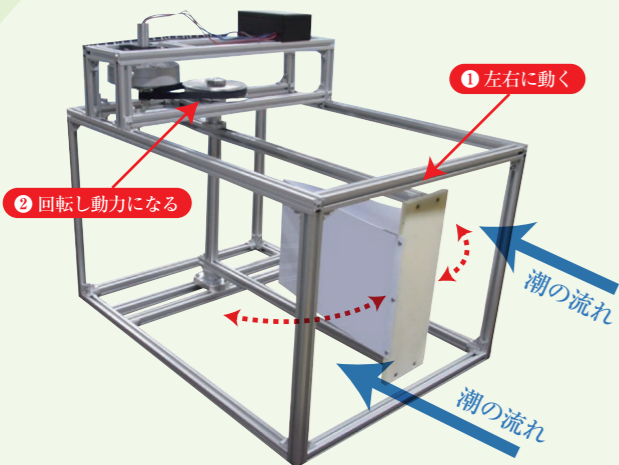
長崎県五島市では、国が主導する海洋再生可能エネルギーの開発が産官学で連携して進められています。その現場で実際に働くエンジニアの一人が末吉麟さん。工学部卒業後、協和機電工業に就職し、事業開発部に所属しています。いくつかのプロジェクトの中で、特に潮流発電に関わっているのだそうです。

「再生可能エネルギーの開発はこれからの日本には欠かせません。国のエネルギー技術産業開発機構では、海洋エネルギーに関してのあたりで発電のポテンシャルがあるかという全国調査をしたところ、五島付近と瀬戸内海で潮流発電が可能ではないかということが分かりました。それで私たちが五島を中心に調査を行っています。そもそも、潮の流れで発電すると

自社の技術をコアにしながら 新しいジャンルに挑む

実際に社会に出て、大学での学びは役立っていますか？

「それは実感していますね。私自身は、機械工学コース専攻でロボットに興味があった山本研究室を選んだのですが、入った時は周囲の人の知識力が高くて追い付くのが大変でした。通常、大学院生と学部生がチームになって取り組むのですが、たまたま私の時は学部生だけで、自律的に障害物をよけて動く魚ロボットの研究を行いました。当然手持ちの知識だけでは足りず、電気や情報、プログラミングなど必要な知識を夢中で取り込みました。



弾性振動翼の機器。枠にかこまれた白い部分がいわゆる「ヒレ」にあたることで、潮流によって左右に振動する動きが上部の回転動力に変わるしくみです。
資料提供/工学研究科 山本郁夫研究室

は、どのようなしくみでしょう？
「私が師事していた工学研究科の山本郁夫教授が研究を進めている『弾性振動翼』を用いるのですが、これは魚のヒレのような動きをします。つまり、人工的なヒレのようなものを作り、潮の流れで振動させることで、その動きを回転エネルギーに変換させて電気を

協和機電工業事業開発部

末吉麟さん
Rin SUEYOSHI

風車を使った新しい発電機器開発のため、風の代わりに模擬的に回転モーターをまわす装置を動かす末吉さん。



作ります。私は、山本先生が作った弾性振動翼を、魚ロボットのヒレとして用いていました。潮流発電はその逆転の発想で、同じ仕組みのものを発電に利用しています。なるほど。それで今はどこまで進んでいるのでしょうか。機械のデバイス開発は別のチーム

で、私自身は制御から蓄電、利用に至るまでのシステム全体をまとめる担当となり、地元のニーズを探る市場調査も行っています。潮流発電はどこでもできるものではなく、特に潮の流れが速い場所が可能になります。今は、五島の海や川などで流速が速いポイントまで出向き、状況を確認している段階です。そこでニーズがあれば実証実験を行い、潮流発電を利用することでどの程度のコストダウンができるかといった試算に進みます。その結果が良ければシステムとして買ってもらうことができ、そこで初めて事業が成り立ちます。場合によっては、潮流力と風力、太陽光発電など複合エネルギーの選定やシステム設計も必要でしょう。ですから、プロジェクト全体としてはまだ道半ばです。

五島沖に設置した海洋統合環境無人観測プラットフォーム。洋上風力発電に必要な情報が取得できるこの機器の電源部分が協和機電の担当で、末吉さんは組込配線工事などを行いました。



今となってみると、それが良い経験になりました。こうして実際のプロジェクトに関わっていると、開発は一つの専門で成り立っているわけではなくて、他分野を理解していないと全体が把握できないことがよく分かります。電動機のメンテナンスから起業し、水処理機器やシステム、発電をはじめとする電気関連など、着々と事業の幅を広げている協和機電工業。その事業開発部となると、期待されることも多

いのでは？
「はい、この部は社内でも特に若手が多いのです。私が一番若いんですが（笑）。最新技術がどこまで進んでいるか、自社の技術がどのような新しいジャンルに生かせるかを常に考えるところからは言われています。これまでの過去や前例にとられるなども。最新の論文をチェックしたり学会に足を運んだり、技術セミナーに参加して内容を上に報告するのも大切な仕事で

す。そこで議論を理解して情報を選択するためには、基本的な知識だけでなく、世の中の動きにも敏感になる必要があります。私は新しい提案をするにはまだ力不足なので、これからも学ぶべきことは多いですね。再生可能エネルギーをはじめ、新しい技術は世の中を変える力があります。若い世代のアンテナ感度の良さを生かすことができるポジションで、これからは末吉さんの挑戦が続きます。



観光は長崎の基幹産業 今後の最注目は、島への旅

長崎県文化観光国際部 観光振興課 課長補佐

松尾由美さん

Yumi MATSUO

Profile

まつお ゆみ
長崎市出身。長崎大学経済学部卒業後、長崎県庁に入庁。五島支庁などを経て広報広聴課に在籍中、出産と育児休業を経験。その後、水産部、国体部などを経験し、再び広報課へ。今年度より現職。

過去最高の観光客延べ数は インバウンドの影響大

長崎港の新しいランドマーク、新県庁舎。一階エントランスホールには、長崎県下各地の観光パンフレットがずらりと並んでいます。

「新県庁舎を見学に来られる方々も多く、皆さん観光パンフレットを手に取られます。すぐなくなるので補充が欠かせません」と語る松尾由美さんは経済学部を卒業し、現在は長崎県文化観光国際部観光振興課の課長補佐です。観光を基幹産業とする長崎県としては、かなり忙しいポジションと推察します。

「県全体では、二〇一七年に観光客延べ数が三千三百五十六万人に達しました。統計を取り始めた一九七二年以降、最高記録です。『明治日本の産業革命遺産』の世界遺産登録が実現した二〇一五年が過去最高でしたが、熊本

地震からの持ち直しやクルーズ客船の寄港が増えたことなどが要因といわれています」。

三千三百五十六万人！ そんなにきているんですか。
「はい。インバウンドの影響は大きいですね。昨年度から部内に国際観光振興室という組織ができて、クルーズや航空機対策などの外国人観光客に特化した業務や、海外からの誘客促進などを行っています。私が所属するのは国内振興班で、国内の誘客が主な仕事です。旅行代理店にツアー商品を作ってもらったりもするのですが、着任した頃は専門用語に目を白黒させました。例えば『〇人泊』という言い方。一人が三泊しても、三人が一泊しても、三人泊なんです。旅行代理店の商品に



長崎と佐賀の魅力を詰め込んだ冊子「S&N」

今年度春に観光振興課に異動した松尾さん。以前は通算九年間広報課に在籍していました。
「県の仕事を県民に周知する部署だったので、外部の放送局や編集者の方とのつながりが今の仕事にも役立っています。広報班長として班員の文章チェックもしていたので、今も印刷物の言い回しがつい目についてしまい、『細かいなあコイツは』と思われるくらいかもしれません(笑)」。
経済学部在学中はどんな学生だったのでしょうか。

大学時代の経験を糧に まずは現場に足を運ぶ

も、募集型、受注型、エスコート型などがあり、今はようやく言葉にも慣れてきました」。
情報発信も大きな仕事の一つで、観光パンフレットの制作に携わっていると聞きました。
「エリア別のパンフレットのほか、数年後の新幹線開通を見据えて関西方面への情報発信のための冊子『SとN』の発行にも携わっています。Sは佐賀、Nは長崎。両県が連携して地域の魅力を発信し、冊子発行に合わせて関西で誘客イベントもしています」。

「経営史を専攻し、ゼミでは五島や島原などに合宿に行っていました。長崎大学では早い時期からフィールドワークを体験できるので楽しかったですね。そのうち自分で福岡のマスコミゼミナーに申し込んで、さらに行動範囲を広げました。意識の高い学生も多くて、雲仙普賢岳の被災地や玄海原子力発電所などニュースの現場に仲間と行くこともありました」。

それは今の仕事にも役立っていますか？
「かなり役立っています。行政のイベントにもよく足を運びます。すると、こんな人たちが興味を持っているのかとか、意外と人気がないなとか。データの分析も大切ですが、現場に行かないと見えないこともあって、総合的に判断材料としています。今の学生さんも、各地に足を運んで人と接する経験をするのが後で力になりますよ」。

「去年の観光客数が過去最高となると、今後の展開も気になります。
「昨年度からは『しま旅 滞在促進事業』も行っています。これは、島での宿泊と地元の体験プログラムを組み合わせたお得

写真上／新庁舎の8階には長崎港を一望できる展望室があります。「一般の方も利用できます。長崎県産の家具も置かれており、くつろげるスペースです。新しい観光スポットとして県外の方にもおいでいただきたいですね」。下／こちらがエントランスホール。福山雅治さんの大きなフラッグが話題です。





長崎港の出船入船には 熟練水先人の「嚮導」が欠かせない

Profile

まつだしゅういち
長崎市出身。1973年長崎大学水産学部卒業。航海士資格取得後15年の乗船経験と7年の船長経験を経て、水先人資格を取得。長崎港の大型船の安全航行をつかさどる立場となる。

海の上は陸上同様ルールあり
この水域が彼らの仕事場

長崎港にやってくる国際クルーズ客船は、年々増えています。二〇一五年には百三十一隻、二〇一六年には百九十七隻、二〇一七年には二百六十七隻。長崎港を母港としない外国の大きな船が長崎港に入港する場合、船に乗り込んで誘導する「水先人」が必要とされます。よく「水先案内人」と言いますが、「水先人（パイロット）」が正しい呼び名。水産学部の卒業生である松田秀一さんはその水先人の一人として、日々、長崎港の大型船の誘導を行っています。

「業務は水先人会で引き受けるのですが、ここ数年間は二人で回っていました。今年新人が入ってきたので今は三人、来年は四人になる予定です。ここ数年はクルーズ客船の入港なども増え、かなり忙しいですね。一日に三、

四回乗り込むこともありますよ」。

船の先を航行して誘導するのではなく、実際に乗り込むのですね。

「はい、水先艇に乗船して、長崎なら伊王島の北一海里のパイロットステーションで要請があった船に乗り込みます。パイロットトラダーと呼ばれる縄ばしごや、可動式の階段を上って乗船するので、風や波のコンディションが悪い時は細心の注意を払います。それから船橋（ブリッジ）に上がり船長と情報交換をして嚮導します。海には航行安全のためのルールが決められています

が、海上では波や風、潮流など自然条件が変化します。特に多くの船が行き交う水域で大型船を航行させるのは難易度も上がります。そこで、水域の事情を熟知した専門家のアドバイスが欠かせず、我々水先人の出番となります」。

松田さんの使う「嚮導」とは、先に立つて導く、という意味の言葉で、水先人の会話では普通によく登場します。明治時代から使われている言葉のようです。ところで、中国からの観光クルーズ客船に乗り込むと、中国人の船長さんとやりとりするのですか？

「そうとは限りません。船籍や船会社はまた別で、イタリア人のクルーというケースもありますよ。もっとも、船の専門用語を含む会話はどの国の船でも英語なので、それほど不自由はありません。船籍や船会社はまた別で、イタリア人のクルーというケースもありますよ。もっとも、船の専門用語を含む会話はどの国の船でも英語なので、それほど不自由はありません。

一級水先人

松田秀一さん

Shuichi MATSUDA



ません。ただ、計器や機器の性能は船によって違い、癖もあるので、あまり計器を当てにせず、目測を基準にしな

ら嚮導します。陸上のあの目印まで来たならこの手順に移る、というやり方ですね。また、出港する時も乗り込んで嚮導し、沖防波堤の手前で下船します」。

水先人が乗る場合とそうでない場合、安全確率は十倍近く違うともいわれています。まさに、海上交通のインフラ的存在なんですね。

乗船経験が必要な国家資格
近年は養成施設もあり

そもそも、水先人になるにはどうし

たらいいのでしょうか。

「水先人の国家資格には受験資格として一定の乗船経験や船長経験が必要です。私自身も航海士として十五年、船長として七年という乗船経験を積んで一級資格を取りました。ただ、最近はや業界の事情もあり、船長、航海士経験がなくても三級を受験することもできるようになりました」。

これまでは外国航路の船長などを経験した大ベテランが水先人になるケースが多く、プロとしてデビューするのは四十代、五十代が普通だったこの世界。制度の改正により、登録水先人養成施設で二年半の養成課程を修了して試験に合格すれば三級の資格を取得でき、その後も乗船経験に応じてステップアップもできるようになりました。

松田さんは水産学部の二十一期生。

同級生の友人の多くは、水産・船舶関係の第一線で働いており、活躍の場はまさに全国津々浦々。たまに会うと学生時代に戻って盛り上がるのだそうです。

「水産学部の新しい長崎丸はかなり良いと聞いています。そこでの経験をきっかけに、船に関わる仕事を選ばすね。長崎の街にとって港の活性化は必須で、水先人のニーズはますます高まるでしょう。今後は、この業務を担う次の世代を育てて引き継いでいきたいですね」。